第66・67回日本臨床皮膚科医会北海道ブロック研修講演会

学術担当　小泉皮膚科クリニック　小泉　洋子

日本臨床皮膚科医会北海道ブロックが開催した平成30年度の研修講演会の御報告を申し上げます。４月８日京王プラザホテルに於いて第66回日本臨床皮膚科医会北海道ブロック研修講演会では「アトピー性皮膚炎治療Up to Date」を三重大学大学院医学研究科皮膚科教授山中恵一先生がご講演されました。第67回は10月20日札幌プリンスホテルにて「新規経口抗真菌薬ホスラブコナゾールがもたらす爪白癬治療の変革」と題してNTT東日本関東病院皮膚科部長五十嵐敦之先生がご講演されました。「いい皮膚の日」市民講座もこの日同じホテルで開催されました。

山中先生は、アレルギー性炎症の舌下免疫療法について、その手技、抑制性Ｔ細胞（Treg）の誘導をきたすことからお話は始まりました。くしゃみ、鼻汁、鼻閉、目のかゆみ等のスギ花粉症症状は軽減します。杉を植林している近辺ではスギ花粉症の罹患率が低い、漆職人は次第に漆にかぶれなくなる事柄を示し、高濃度のアレルゲンを集中的に暴露するとアレルギー症状が和らぎ、減感作量法と同じくＴregが誘導されるのであろうと言います。癌分野でも免疫応答を治療に応用してきています。アトピー性皮膚炎ではどうでしょう。アトピー性皮膚炎の症例を示し、強い掻痒に、強い効果があり眠気の少ない抗ヒスタミン薬が望まれます。動画で睡眠時の掻破行動を抗ヒスタミン薬が抑制することを示しました。一方ポリグラフでは抗ヒスタミン薬により睡眠の質に差はありませんでした。また写真でフォローすると大体同じところに発疹が出るのはresident memory T cellが病変部直下に年余にわたって存在するからと説明されます。外用療法については効果的な方法はなにか、軟膏に比してローション群のほうが効果あったのです。ローションのほうが塗りやすくきちんと使用していたことが役に立ちます。街角アンケートも行って、外用薬基剤はクリーム、ローションがよいという声が多かった。軟膏については塗った感じが充実感があるという意見もありました。患者のニーズに応じた剤型の選択が効果をもたらすと考えられます。保湿剤を使用すると乳児のアトピー性皮膚炎を発症しない確率が高くなります。掻破すると皮膚が壊れ、Ｂ細胞がIgE産生に傾く。itch-scratch-cycleが起きる。適切な薬で痒みを止めて掻かないようにしなくてはいけない。乾癬は６年近く寿命が短いが、心筋梗塞、脳梗塞の危険性は乾癬治療で下がります。皮膚炎が、全身の炎症を招き、インスリン抵抗性、血管内皮細胞機能障害、動脈硬化症、脳血管イベントを引き起こすInflammatory skin marchはアトピー性皮膚炎でも起こっているでしょう。アトピー性皮膚炎を治療することの大切さを訴えました。

五十嵐先生は新しい爪白癬内服治療について講演されました。爪白癬は爪の混濁変形をきたします。サンダルを履きたい等の美容を損なうのみではなく、痛みや歩行困難をきたし、QOLを損なう疾患です。2000年Japan Foot Weekでは足白癬は2144万人、爪白癬は1190万人、10人に１人と報告されています。またレセプトデータから患者数の推移をみてみると2015年爪白癬は200万人であり、治療を受けていない患者が多いことが知れます。爪白癬の診断は鏡検で行います。実際の方法や、顕微鏡で見られる大型胞子の像を示しました。検体採取等に関する厚生労働省指定講習会が行われており、臨床検査技師が受けるが、参加者に対する調査では実際には爪白癬の検査は専ら皮膚科医師によって行われています。臨床形により治療反応性に差がある。鑑別疾患は爪カンジダ症、乾癬、掌蹠膿疱症、扁平苔癬、細菌性爪囲炎、爪甲肥厚症、爪甲剥離症等種々あるから診断確定が大切です。この度約20年ぶりに承認された経口爪白癬治療薬がホスラブコナゾールです。100mg１日１回12週間内服します。本薬はラブコナゾールのプロドラッグである。水溶性で吸収が良く食事の影響を受けない。血漿中の濃度は静脈内投与と差がなく、治験では48週後の完全治癒率は60％であった。混濁面積比をみると86.5％軽快している。副作用は肝機能数値異常、胃部不快感、便秘などが挙げられる。GOT、GPTの中止基準は基準値の2.5倍である。γ-GTの上昇は一時的なもので肝機能障害ではなく回復する。妊婦、妊娠の可能性のある人は禁忌である。授乳は避ける。小児の安全性は確立していない。実臨床における課題は爪白癬治療外用薬との併用である。また保険上の問題点は再投与のタイミング、３ヵ月でいいのではないか。外用先行からの切り替えはよい。他内服薬からの切り替えはよい。前投薬ありで変更の時鏡検検査は不要である。ニーズの高いことがうかがわれる新しい内服爪白癬治療薬である。注意を払うべきは、肝機能検査、議論のある所は外用爪白癬治療薬との併用の仕方であります。患者さんの希望を叶えるべく上手に使っていきたい薬剤であると考えました。